

左地亮子著

『現代フランスを生きるジプシー——旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』

世界思想社、2017 年、5,200 円＋税、304 頁

古川不可知

旅とは、われわれ定住民にとって住まうべき家を離れた境界状態であり、日常生活からの離脱に対する恐れと憧れという両義的な感情を掻き立てることを、おそらく多くの読者は否定しないだろう。「旅に住まう」という、どことなくパラドキシカルな響きを持つフレーズを副題に添えた本書は、現代フランスの「ジプシー」であるマヌーシュの人々の民族誌であり、「住まう」という日常的な実践をめぐる論考である。2012 年に筑波大学に提出された博士論文をもとにして上梓された本書は、2017 年度のサントリー学芸賞思想・歴史部門を受賞している。

本書はⅡ部構成を取り、本編 6 章に序章と終章を加えた全 8 章からなっている。まずは以下に全体の目次を示す。

序 章	ジプシーの住まいと共同性をめぐって
第Ⅰ部	旅の道具としてのキャラヴァン——定住化の時代における共同体と移動生活
第 1 章	変動するマヌーシュ共同体
第 2 章	行き詰まるキャラヴァン居住
第 3 章	定住化の時代におけるノマディズムの再編
第Ⅱ部	居住の道具としてのキャラヴァン——身体、他者、環境との関係
第 4 章	〈外〉へと開かれる住まいと身体
第 5 章	身体を包み、位置づけるキャラヴァン
第 6 章	キャラヴァンが支える沈黙の共同性
終 章	紡がれる〈私たち〉とその居場所

一見して把握できる通り、第Ⅰ部ではキャラヴァンが持つ旅の道具としての側面に焦点を当てながら、マヌーシュの人々の移動生活から定住生活への移行が論じられ、第Ⅱ部で

は居住の道具としてのキャラヴァンをフォーカスしつつ、住まうという身体実践が主題化される。さらに第Ⅱ部では、第4章でキャラヴァンの外部空間が、第5章ではキャラヴァンの内部空間が分析され、第6章ではマヌーシュの共同性を支えるモノとしてのキャラヴァン自体が扱われる。そして全体としては一つの問い、すなわちキャラヴァンに住まうことを通して、マヌーシュがさまざまな他者とのあいだにどのように結びつきを作りあげているのかという点が論じられる。論旨は明快にして構成も有機的であり、全体の見通しは良好である。それでは次に、各章ごとの内容を詳しく見てゆきたい。

序章では、マヌーシュの人々の現況とジプシー研究のレビュー、および理論的枠組みの提示がなされる。本書が対象とするのは、フランス南西部のスペイン国境に近いポー地域に居住する、ジプシーの下位集団マヌーシュの人々である。かつてはルーロットと呼ばれる家具馬車に住んで移動生活をしていた彼らは、現在では公営の宿营地や私有する「家族用地」にキャラヴァンと呼ばれる市販のキャンピング・トレーラーを停め、動くことなくそのなかで生活することが多くなっている。著者はこのように定住化が進みながらもキャラヴァンに住まい続けるマヌーシュの人々について、人々の居住実践がどのように変容しているか（第Ⅰ部）、またキャラヴァン居住がどのように固有の生を形作るのか（第Ⅱ部）という二つの問いを設定する。その際に参照されるのが、身体とモノ、および環境の相互作用を論じる人類学の議論であり、特に、人間は一方的に環境を解釈して意味を付与する超越的主体ではなく、モノや他者とともに環境中に「住まうこと」を通して相互を織りあげるとするティム・インゴルドらの観点である。ここでは「モノとの出会いが「概念的な創出行為」なのであり、物質的なものと精神的なものの相互浸透的な交わりが人の生活世界を支え構築して」（25頁：以下、本書からの引用頁は数字のみを記載する）おり、そうした直接的・身体的な関わりを通して、個と共同性が多層的に紡ぎあげられてゆくとするのが本書の基本的な視点となる。著者は、「「キャラヴァンに住まうこと」が、彼らの「マヌーシュであること」という感覚や「共同性」と切り離すことのできない生の営みであることを示したい」（5）と述べ、「「定住化の時代におけるキャラヴァン居住」を人々が社会変化のなかで自らの居場所を再構築していく創造的な行為として描きだすことを目指す」（19）と宣言する。

第Ⅰ部では、定住化の過程でマヌーシュの社会や居住実践がどのように変化してきたのかが確認される。第1章では、第二次世界大戦後にマヌーシュの人々が移動生活から定住生活へと移行する歴史的過程が描かれ、とりわけ定住化が社会関係に及ぼした影響について論じられる。移動生活時代のマヌーシュは、拡大家族を基礎に離合集散する流動的な集団編成を取っており、そうした「柔軟性の原理」は定住化の過程でも発揮されたのだと著者は指摘する。ポー地域に定住するようになったマヌーシュの人々は、通婚を通して非マヌーシュのジプシーや定住民も成員として受け入れ、「ポーのマヌーシュ」と言われるような地域に基づく新たな共同体を生み出してきた。そしてこの地縁共同体もまた、マヌーシュにとってはあくまでも複数の帰属先の一つにすぎず、ときに個別の家族は親族の住む他地域の集団に合流したり、また別な家族と信仰集会に出かけたりする。つまりマヌーシュの人々は、移動生活であれ定住生活であれ、「住まう」という日常実践に基づいて生

起する共同性を通して柔軟に集団を編成し、現在もまた変化し続けているのである。

第2章では定住化に伴う生活の変容が、特に定住民との関係を軸に描き出される。まずフランスで移動生活者に対してなされてきた政策の歴史が概観されたのち、定住化の進展とともにマヌーシュの生業であった移動のなかでおこなわれる経済活動が衰退してきたことが述べられる。そして定住化が進んだ世代の若者たちは、メディアや学校教育などを通して定住社会の価値観を部分的に受け入れつつも、その方向に社会関係を拡張してゆくことは難しいと指摘される。定住化に伴う矛盾と葛藤は、マヌーシュの生活の多くの面にあらわれている。

第3章では、それでも人々がキャラヴァンに住み続けるのはなぜかという点が問われる。著者は前章で、ジプシーの移動生活を尊重するために作られたはずの公営の宿営地は、いちど旅に出ると同じ場所に戻れる保証がないため移動を困難にすると指摘していた。他方、「家族用地」と呼ばれる私有地を持つマヌーシュ家族にはいつでも出発して戻ってくる自由があり、いまでも比較的活発に移動式の活動に従事するという。本章では、「家族用地」を持つマヌーシュ一家の事例を取り上げながら、定着生活のなかに旅の可能性を含みこむようにして新たな移動の生活様式を再編成していることが論じられる。象徴的なのは、土地と建物を持っているマヌーシュも、睡眠はキャラヴァンのなかで取るという事実である。マヌーシュは、「「定着のための土地」を確保することで、移動と定着の接合からなる生活空間を構築しようとして」おり、「そこでは移動と定着が相反するものとしてあらわれるのではなく、相補的に一つの生活空間のなかに織りこまれて」いる(133-134)。そして著者は言う。「マヌーシュの現代におけるノマディズムは、単なる伝統への愛着を超えて、定住化という社会変化を生きぬくために彼らが新たに編みだす、創造的な旅と居住の実践なのだ」(135)。

第Ⅱ部では、住まう道具としてのキャラヴァンに焦点が当てられ、キャラヴァンを介した身体と環境との関わりが考察されてゆく。第Ⅱ部の開始を告げる第4章では、キャラヴァンを介して野外環境を居住空間に組み込むマヌーシュの実践が分析される。著者は冒頭で、道路に相對する形でいすを並べて食事し、談笑するマヌーシュの姿を描写する。定住民の住居がまず空間を囲い込んだうえでその「全体」を分節化してゆくのに対し、マヌーシュの場合は「部分」としての小さなキャラヴァンを起点に野外環境を取り込んで、居住空間をゆるやかに拡張してゆくのだと著者は言う。そして彼らは、空間を物理的な障壁で区切ることなく外側に開く一方、心的な距離を保つための「身体化された共在の技法」を通して他者との不可視の境界を交渉する。興味深いのは、マヌーシュの人々が居住空間を外側へと開いて共同性を作り出すやりかたは、定住民に対しても同様であるということだ。著者は、「マヌーシュは他者の只中で、その資源を柔軟に取りこむことで彼ら独自の生活を維持し再編してきた」(178)と言い、「こうした他者との相互行為のあり方や共同性に自らの住まいと身体を開くことを選択するがゆえに、マヌーシュはキャラヴァンに住み続けるのだとも考えることができる」(178)と論じる。もともと、いわゆる公共空間と私的空間を攪乱するようなこうした振る舞いは、定住民がマヌーシュのキャラヴァン生活を問題視することにつながっている点も指摘される。

キャラヴァンの外部空間を論じていた第4章に対して、第5章で扱われるのはキャラヴァン内部の空間である。キャラヴァンの内部は原則として私秘的な空間であり、睡眠や着替えといった行為のみがおこなわれる。著者は、あるマヌーシュ女性が発した「私たちはまるでエスカルゴなのよ!」という印象的な発言を切り口にしながら、マヌーシュにとってキャラヴァンは身体の延長であり、個人の身体を社会化して共同性の空間のなかにそのつど適切な形で位置付けなおすための「社会的皮膚」とであると論じる(196-198)。これはメタファーではなく、次章で詳細に論じられる通りマヌーシュの人々は実際に人生の節目でキャラヴァンを変えるのである。ただし注意すべきは、キャラヴァンは個人の専有物ではなく、親密な他者の身体とともに住みこむ共同的な空間でもあることだ。直接的な身体接触を通して共同性を育むキャラヴァン内部において、自己や他者は、少なくとも西洋的な画然たる個としては存在しない。キャラヴァンが立ち上げるのは、個的かつ共同的な空間なのである。

第6章で論じられるのは、結婚と死という人生儀礼においてキャラヴァンが果たす役割である。他者の特異性に対する敬意ゆえに、駆け落ちや死といった人生上の重要な出来事について沈黙するマヌーシュの振る舞いは、こうした重大な経験を集団に還元して社会を再編成するプロセスを欠くと著者は指摘する。そこで重要になるのが身体の延長であり、モノかつ概念としてのキャラヴァンである。結婚に際してカップルに与えられる新しいキャラヴァンや、死に際して放棄されたキャラヴァンの不在は、語られぬ個の変容を共同性の空間において了解された現実とする。「キャラヴァンに住まうことは、マヌーシュが、日々の住まうという営みのなかで彼ら固有の生の様式を確認しながら、自らの居場所をつくりだしていく創造的行為だといえるのだ」(244)。

終章では全体の総括がおこなわれたのち、キャラヴァンに住まうことはマヌーシュの人々の変化の只中で自らの居場所を創出する実践であることが改めて述べられる。重要なことは、こうした住まうことを通じた居場所の創出は決してマヌーシュたちのエキゾティックな実践なのではなく、多かれ少なかれ変化のなかに生きるわれわれにとっても同様に日常的で重要な実践だということである。

まず現代フランスという日本の人類学書にしては比較的珍しいフィールドと、ある種のロマンティックなイメージとともに想起されるジプシーという対象のため、ヨーロッパには縁遠い評者にとって本書は純粋に興味深いものであった。不勉強をさらすことになるが、現在のフランスにおいてもキャラヴァンと呼ばれるキャンピング・トレーラーに住まい、定住化が進んでいるとはいえ常に移動の可能性のなかに生きる人々がいるということ、またフランス国家や地方政府がさまざまな制度の整備などを通して彼／彼女らの包摂(あるいは排除)を試みているということに、事実のレベルから驚きと関心を持って読み進めた。さまざまなエピソードに彩られた本書は読み物としても良質であり、人類学に専門的な関心を持たない多くの一般読者にとっても豊かな読書経験をもたらすことである。

う。

評者の観点から見た本書の理論的意義もまた上記の点に関わる。現在の人類学において、身体とモノや環境との直接知覚的な関わりを論じる議論は一つの主要なトピックを形成している。だがそうした潮流の中心にあり、本書も大きく依拠しているインゴルドの環境論では、議論はほとんど身体と自然環境との関係に限定されていた。さらにインゴルドは、環境に埋め込まれた有機的な身体というありかたを理想的な状態としてほぼ無条件に肯定する。こうした議論からは、環境が人間に及ぼすネガティブな側面が取り落とされるのみならず、現代のわれわれが否応なく位置付けられた国家や技術の介在する環境を捉えることも難しくなっていた。一方で本書の事例が示しているのは、マヌーシュの人々が自らの生活を脅かす環境のなかを、身体的な構えを通して生き抜くやりかたである。とりわけ本書の重要な点は、何が自然的であり何が社会的であるかを分析的に外から切り分けるのではなく、彼らが位置付けられた環境をそのまま彼らの語りと実践を通して捉えてゆくことにある。本書は身体と環境をめぐる人類学の議論をいわゆる「現代社会」へと拡張することに成功していると同時に、環境の種類を先験的に区分するような従来の環境観を乗り越える可能性を提示している。

ただし第2章から第3章の議論を見る限り、他者の只中でうまく生活を再編できているのは、首尾よく「家族用地」を獲得することに成功した一部の家族に過ぎないのではないのかという疑問も生じる。「移動と定着という二つの生活相が相補的に重なりあう新たな旅と居住の実践」(247)を編み出すことは確かに希望だとしても、それがマヌーシュ全体にとってどの程度まで一般的な実践なのかという点は気にかかった。

また「身体」や「共同性」をはじめとするキー概念については、明示的な定義や類似概念との差異化がなされていれば、さらに読者の理解を助けたのではないかと感じるところもある。評者の読みが正しければ本書の主調をなすのは、象徴的な空間論や身体論を批判しつつ、「住まう」という身体の物理的かつ直接知覚的な関わりが共同性を生むという議論である(e.g. 193)。だがそうだとすると、たとえば「ロマノ・ラップ〔本当の名前〕は繰り返し「声」に出して呼ばれることで、一人ひとりの身体に刻み込まれていく」(225)や、「「地縁」という新たな共同性を育てていった」(52)といった、直接的な身体性を越える領域へとこれらの概念が拡張されるような記述と出会うとき、それらが厳密にどのような事態を指しているのか評者にはいささか不分明に思えた。

最後にもう一点、本書の議論にとっては筋違いであることを承知のうえで敢えて述べるならば、山道と歩行を研究テーマとする評者としてはどうしても実際の移動の様子について知りたいと考えてしまう。たとえばインゴルドらは「人は社会的だから歩くというだけではなく、歩くから社会的なのだ」[Ingold & Vergunst 2008: 1]と述べ、パースペクティヴを共有してともに移動することが社会性を生むと論じていた。またジェームズ・ギブソンは、移動する視覚とは環境を知覚すると同時に自己を知覚することであると指摘していた[ギブソン 1986: 121-136]。おそらくキャラヴァンが移動する際には、停止して周囲の環境を居住空間化するときとは全く別様の身体的な構えと自己認識があり、そこでは別種の共同性が生起していることであろう。そしてこうした移動の実践を捉えたときには、宿

営地でキャラヴァンに住まうという実践もまた新たな意味を露わにするのではなかろうか。

繰り返しになるが、的確なテーマ設定と綿密なフィールドワークに裏打ちされた本書は、一般的な書物としての価値と人類学的な価値をともに備える優れた一書である。評者によるいくつかのコメントは、むしろ本書がさらなる展開可能性を秘めているがゆえに生じた興味関心だといえる。この書評が、たとえ「緊張関係を孕みながらたちあらわれる人と人の結びつき」(158) だとしても、何かしらの共同性を立ち上げ、著者や読者による新たな「創造的行為」のささやかな一部となるのであれば幸いである。

<参考文献>

ギブソン、ジェームズ 1985 『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳、サイエンス社。

Ingold, Tim & Jo Lee Vergunst 2008 *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*. Hampshire: Ashgate.